新春対談〔下〕

忠類村長 遠藤 清一　参議院議員 紙 智子

小さくても豊かな村づくり

（前号のつづき）

村長――いや～その通り。ですからね、国の財政難もわかるんですけど、道の財政も破綻状態ですよ。われわれの村も何年かはやれますけども将来は、どうにもこうにもならない。いまの水準を保とうとしても絶対無理です。

ですから行財政改革、を進めながら事業を止めたり、見直したり、住民の要望を全部聞けないような状態になっているので、出来ること、出来ないことをはっきり言わせてもらっている。ですから合併してもしなくても、どっちも地方には、きびしい状況です。

紙――そこで生活して住んでいる人たち、住民にとってやっぱり生きる権利にかかってくる問題です。

村長――ですからね、こういうことは僕は正直に言っています。「合併してもいままでのサービス水準落ちますよ、負担は増えますよ」

紙――奈井江町で住民投票やって子ども投票をしましたね。

村長――忠類村と更別村と幕別町で法定協議会に入りますけども、余りにも不利であれば、その時はまた住民に相談をして、「それでも一緒になるのか、どうするんだ」ということなんですね。住民投票が悪いとは思っていませんが、私は住民の声を集約して考えたいと。

紙――全国をながめてみますと、例えば高知県の小さな村で自立して自分たちだけで果してやっていける道があるのか経済的にどういうふうにやっていけるんだろうかと探求しています。

柚子の生産加工でどれだけの年間収入を得ることができるのか、それから林業の分野でも収入を得て行くということで、年間何億を生み出すというようなことで、いろいろみんなが智恵を出してやっていける方向をきぐっていこうと努力しています。

合併しなくても当面やれる

村長――うちちもね、事務事業の見直し等いろんなことをやってきましたよ。財政的には七～八年は合併しなくても大丈夫なんですよ。でも孫子の代のことを考えて、住民に相談したら、合併はしたくないけども合併せざるを得ないと言う声がアンケートでは七十％以上でした。

紙――本当に住民による十分な話し合いが必要な問題だと思います。私たち兵庫県の立場としては自立の道をめざす。場合によっては一緒になってこういう方向で合併しようというところもあるでしょうけども。そうじゃなく独自の道をいきたいという場合には、それを尊重していく。

一番の動機が財政問題で、国の財政が大変だから地方も我慢せよ、ということで地方を切り捨てることにすりかわってしまっているのでないかと危惧します。

村長――国の財政難が気がついたら、金の話し、地方財政の話にすりかえられた。

紙――そうですね。まったく変です。生活していくところでみんなが結束してまとまってやってきたから、市町村とはそういう自分たちの暮らしを守っていけるということが基本なんだとおもうんですね。

村長――いまの合併論議では、まず自分たちの給料を下げるとか、いろんなことを先にしてから、住民へのサービスなどを見直しをしてね、自分たちも努力をしてから、住民の人たちにも理解してほしいというふうに。

ところが、国のやっていることをみると、われわれには我慢せい、我慢せいと言いながら、国会議員さんの数を減らしてみるとか、省庁の役人を減らすとか、国民に分かりやすく説明できることをやっていかないのかな。

紙――今回の「三位一体の改革」というのはいったい誰の目から見た改革なのか、大事なのは住民とか地方の自治体から見ての「改革」というのがどういうものなのか、自治体の側から示すことが大事だと思います。

やっぱり福祉や教育というのは削るべきではない、そこは残しながら本当に村のところでの改革はないのかという議論をもっとすべきだと思います。

いま自衛隊派兵がもちあがっていますが、それにともなって大変な財政出動も予想されているわけです。そういうことが本当にどうなんだというやっぱり国政の問題になってくるんですね。

村長――だから僕はね、なんでも反対というのではなくてね、国民の意向を良く考えてほしいですよ、いざ自分の息子が戦争に海外に行くとなったら、穏やかな話ではないですよね。国はもっと国民に理解の得られるようなことをやってほしい、そうすれば協力もするし、理解もできる。

食糧自給率の向上策を国の農政へ注文

紙――国に対しての農業の振興策とか注文を一言どうぞ。

村長――食糧の自給率の問題ですね。五十％に引き上げるように考えてほしい。五十％というラインがはっきりすると、JAやわれわれも農家の人に、例えば牛乳を生産する規模拡大についてのアドバイスや農業の生産など指導できますが、いまの状況ならさっぱり先が見えなくて適切なアドバイスも出来ない。もう少し安定供給、安定生産できるように、国が対策すべきです。

紙――そこは私も一致するところです。本来国は食糧の安定供給に責任を持たなければならない。いまの農政は市場原理がすべてになっているんですね、だから五十％の目標をかかげても、いまのように外国からの輸入作物と競争して勝ったものだけ生き残り、中小規模の弱い農家が消えていくことになれば自給率を引き上げることは、絵に書いた餅で、到達するどころか下がる一方なんです。

いま私たちは、みなさんと共同してすすめないといけないと思っているのは、不公平なWTOの協定によって日本と同じように打撃を受けている国がアジアを含めて多いわけで、各国と共同してそれぞれの国の食糧や農業が安定できるような方向でWTO協定を改定させていくべきだと思うんです。

村長――そこらへんのことをWTOの中でしっかり訴えて、よその国に理解を求めなければ、村の農業がだめになってしまうんです、日本の農業も。

生産者が、再生産できるような体制をつくってやらなきゃならない。国民の食糧自給率を自分たちで高めなかったらおかしいですよ。

紙――忠類村のまちづくりはどうですか。

村長――まず村民が胸をはって、「忠類はいいところだ」といえるような村をつくりたいなと、観光資源が何もなかったんですよ。そこにたまたま昭和四十四年ナウマン象の化石が発掘、それで全国に忠類村が知られるようになった。そして記念館をつくった。温泉がでた。それらの施設を一つの場所に集中して施設をつくった。これが道の駅「ちゅうるい」。泉質もよく村民はもとより他町村から多くの人々に利用されております。村民も「自信を持って」「胸をはって」歓迎しています。

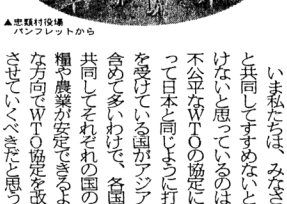
こだわりの豆腐

紙――地元産の食材がおいしいとききましたが。

村長――温泉にはできるだけ地場産のものを使う、豆腐一丁でも地元の豆腐を使う。うちに豆腐屋さん二軒あるんですが、二軒ともこだわりの手作り豆腐をつくっているんです。

もう一つが特産品のユリ根です。やっぱり誇れるものが何かあるということは、住民も生活していて張りがありますよ。

（おわり）



▲忠類村役場
パンフレットから